

護 雅 夫 著

『古代遊牧帝国』

近来、これ程おもしろい書物に出会ったことはない。最近すっかり定着化してきた「護ぶし」とも言える筆法で、読者を引き込んでいく。そして、他の研究者の説を痛烈に批判し、他者の批判には反駁する。

護氏は、長年、北アジア史・チュルク民族史を専門に研究されており、とくに、突厥史研究の権威である。氏は、昭和四二年に、学士院賞受賞に輝く大著『古代トルコ民族史研究Ⅰ』でそれまでの研究成果をまとめられたほか、概説書の類も数多く執筆されている。なかでも、近年刊行された『中国文明と内陸アジア』（講談社、昭和四九年、三上次男・佐久間重男と共著）、『シルクロード事典』（芙蓉書房、昭和五〇年）に収められた「シルクロードと東西文化の交流」等は、本書とも関係の深いものであ

る。（他の著書に関しては巻末の参考文献を参照のこと）。

本書は、まえがきで述べられている如く、突厥国家と、その時代（六―八世紀）の内陸アジアとの歴史を扱ったもので、全七章より成っている。

はじめに

I 突厥（トルコ）の起源をさぐる

II 突厥の建国をめぐる

III シルクロードをおさえて

IV モンゴル高原では

V 中央アジアでは

VI ソグド商人の足跡を追って

VII 突厥の碑文は語る

はじめにでは、「突厥」という漢字がいかなる原音を写したものであるかについて、諸説を紹介した後、著者自身の考えを述べる。Iでは、中国史料を駆使して、六世紀中葉に建国された突厥の源流は、五世紀の高車丁零に、さらには、紀元前三世紀末の丁零にまで溯ることができると説く。IIでは、突厥の支配氏族である阿史那氏の始祖説話を紹介して、そこから、突厥の勃興が、

鉄産や鍛鉄技術と深い関りを持っていたことを述べる。IIIでは、突厥の拠ったアルタイ地域が、交通・貿易路の十字路に当たっていたことを述べ、突厥は、東西の交易路を利用した「絹貿易」によって強盛となったとする。IVは、二百年に亙る東突厥――

第一可汗国と第二可汗国――の歴史の叙述に、Vは、西突厥及びそれを嗣いだ突騎施と、唐やイスラーム勢力との、中央アジアをめぐる抗争の記述に、それぞれ当てられている。VIでは、考古学の発掘記録、貨幣資料、そしてソグド語文書などをも利用して、東から西へ向かうソグド人の足跡を辿り、彼らが、経済的・政治的に突厥国家発展に寄与したことを述べている。VIIでは、ソグド人が果たした文化的役割について述べる。ソグド語・ソグド文字が、五八〇年代の初頭まで「公用の」ものであり、突厥文字の起源は「古代ソグド文字」に求められると。そして最後に、八世紀前半に建てられたホショーツァイダム碑文は「政治的・経済的・信仰的・文化的ナシヨナリズム」の讃歌であったが、それは、草原に響

く狼の遠吠えさながらにむなしく、突厥はまもなくウイグルにとって代られたと結んでいる。

本書は、著者が長年に亘り精魂かけて研鑽してこられた突厥の歴史を、内外研究者の研究成果も踏まえつつ、一冊の本としてまとめ上げられたものである。それゆえ、前述した『中国文明と内陸アジア』の突厥に関する部分をはじめ、既発表の論文・著書と類似した記述も見うけられる。が、けっしてそれだけではなく、例えば、昨年秋季の内陸アジア史学会等で口頭発表された事例や、同じく京都大学の集中講義で話された内容、あるいは、未発表であった研究成果も随処に織り込まれている。とくに、ⅥからⅦにかけてそれが多く見られ、著者が現在持っている関心の在処や、意図する今後の研究方向が示されているように思われる。また、本書は、概説書という体裁をとりながら、専門の研究者に対してもいくつかの問題を投げかけている。本稿の冒頭に記した、他者への批判なども、著者が常日頃話していられるように、「わが国では論

争が少なすぎる」内陸アジア史研究の分野に、意識して、一石を投じたの感が無きにも非ずである。著者の、学問に臨む厳しい姿勢が、そして、著者自身の言葉を借りるならば「近江泥棒、伊勢乞食」の如き飽くなき探求心が、読む者にひしひしと伝わってくる書である。

最後に、一言。著者は、「まえがき」の部分で、東から西へ移動した遊牧トルコ民族が西アジア史上果たした役割の重要性を強調していられるが、はたして読者は、本書から、それを感じとることができるであろうか。西から東へと向かうソグド人の活躍ぶりが浮き彫りにされた反面、肝賢なトルコ人の動きが、やや不鮮明であるように思われる。また、九姓鉄勒にトクズ・オグズとルビをふられた(一二頁)のであるから、チュルクと鉄勒との関係を見事に解き明かされたが如く、鉄勒とオグズとの関係についても、一言、述べていただきたかった。鉄勒とオグズとの関係を明らかにすることが、突厥と西アジア史上で活躍するトルコ族との繋がりを読説く際のキーポイントではないだろうか。紙数の問題もあろうが、「まえがき」で、大上段に振りかぶった刀が、ついに振り下ろされなかったことを物足りなく感じるのは紹介者だけではあるまい。

いずれにしても、わが国ではなじみの薄かった突厥の通史が、初めて、まとまった形で、しかも一部研究者の専有物ではなく、一般読者も容易に接しうる「新書」として刊行されたことは、正に、画期的といえよう。

〔新書版 二五八頁 一九七六年七月 中央公論社 四四〇円〕

(堀川 徹 京都大学助手)